営農情報

トマト・ミニトマト

＊日中の温度管理に注意しましょう。

急な日照により、高温による過乾燥や葉焼けに注意しましょう。

- 生育適温
  20℃～25℃➡25℃以下の管理を心掛ける。
- 定植準備
  地温を必ず18℃以上確保してから定植する。
- 定植適期
  第1花開花までに定植を終えるよう努め、老化苗は避ける。
  ※「りんか409」は特に老化苗回避を徹底する。

土壌のPH・EC濃度を測定し、バランスのとれた土づくりをしましょう。

- 定植から2週間前後で根はりが決まります。萎れないよう手かん水で対応しましょう。
- 定植中の温度管理に気を付けましょう。

※ 高温ヤケに注意

ネギ

＊老化苗の予防に努めましょう。

ほ場が乾かず、定植作業が遅れると、苗が老化していきます。老化苗の予防のため、下記の葉面散布を実施しましょう。

- トップスコアリン：1,000倍

メロン

◆メロンの定植準備

＊本畑の準備

定植2～3週間位前に、樹皮堆肥・石灰類・リン酸資材を全面に施用し、耕起する。

転換畑等の排水の悪い所では、30㎝位の高畦とし、排水を良くするようにする。

マルチは、定植7～10日前に行い、地温（20㎝下で18℃位まで）を上げるようにする。

マルチ用に十分灌水するか、降雨後にマルチングするようにする。

＊肥料

10a当たり樹皮堆肥15袋以上、苦土石灰を100～150kg（PH矯正後）、夢ぼかし5～7袋、BM苦土重焼りん2袋を基本とする。ネット系はこれに準ずる。また、ノーネット系は、夢ぼかしを3～4袋に減肥する。畑の肥沃度により有機入り配合997号をプラスする。また、初期の生育が遅れる畑には即効性肥料を少量加えるとよい。

＊定植

温暖な日を選び、地温が20㎝の深さで18℃以上になった事を必ず確認してから定植する。地温は20㎝の深さだと午前10時から11時が最低地温になります。参考にしてください。

＊定植後の管理

①定植後の温度管理は、トンネル内の温度を30℃以上に上げないよう適時に両側か片側を判断し換気する。尚、メロン苗に直接風が当たらないよう注意して換気を行う。

②整枝は2本仕立てで、2～3回に分けて行い、孫づるは着果節位の手前まで、開花3日前までに終了する。

すいか

◆すいかの定植準備

基本的に準備はメロンと同じです。

＊肥料

10a当たり樹皮堆肥15袋以上、苦土石灰を100～150kg（PH矯正後）、有機入り配合997号を2～3袋、BM苦土重焼りん2袋を基本とする。小玉すいかは997号を2袋、BM苦土重焼りん1袋を基本とする。

小麦

＊病害防除

(1) うどんこ病の防除は、止葉直下葉での発生直後に1回薬剤散布を行うと効果的である。

(2) 赤かび病の適期防除は、1回目が開花始（出穂期3～5日後）～開花期、2回目が1回目の散布7日後である。赤かび病菌は、主に開花期に感染し、発病した穂等を二次感染源として蔓延する。また、病勢が進展してからの防除効果は低下する。

【うどんこ病、赤かび病に登録のある農薬】

薬剤名	倍　率	10a当たり散布量
石灰硫黄合剤	50～60倍	100～150ℓ
トリフミン水和剤	1,000倍	
ストロビーフロアブル	2,000倍	
トップジンM水和剤	1,000～2,000倍	

＊日中の温度管理に注意しましょう。

育苗期間中、急な日照により、高温による過乾燥や葉焼けに注意しましょう。

- 生育適温
  15℃～20℃➡25℃以下の管理に心掛ける。
- 追　肥
  葉色が落ちたら➡「バイオマン」を葉面散布し潅水する。

＊萎ちょう病の防除を徹底しましょう。

近年、萎ちょう病の発生が多く見受けられています。防除薬剤は定植直前処理のみだけで、発病後の薬剤がありませんので、必ず定植前に根部浸漬処理し予防に努めましょう。

- ベンレート水和剤
  100～200倍液➡5分間根部浸漬

にんにく

強風で葉が痛み降雨の影響により葉に雨水が溜まると春腐病が発生しやすくなりますので、治療効果の期待ができる下記の薬剤を参考に防除を行ってください。

尚、ハウス栽培ニンニクは強風や降雨にあたらないので春腐病の被害は少ないですが、極端に乾燥しないよう、ほ場水分の適正管理に努めて下さい。

【春腐病対策】

薬　剤　名	希釈倍数	使用時期	本剤使用回数
カスミンボルドー	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内
バリダシン液剤5	800倍		
アグリマイシン－100	1,000倍		

※Zボルドー（500倍液）も使用可能ですが、あくまで予防的に散布するもので治療効果は期待できません。

【葉面散布】

4月下旬～5月上旬にかけて球肥大始めとなり、リン酸吸収が高まり、葉先枯れ症状が出やすくなるため、葉面散布を実施する。代表的な資材として、アミグロー、トップスコアリンなどがあります。

【追肥】

追肥はリン片分化後～10日に行う。最盛期が4月19日頃となり、それ以降でないと裂球になりやすいので注意する。1回の追肥量は窒素成分量で10a当たり5kg（速効性肥料、燐硝安加里S646だと1袋）を目安にする。

【除けつ】

4月下旬に分株が見られたら実施する。この作業が遅れると株が変形球となりやすいため、分けつしたら速やかに行う。

水稲

健康な土づくりと健苗育成に努めましょう！

1. 中苗育苗

▼温度管理等

- 出芽揃い（80%程度の出芽率）になったら、速やかにシルバーポリトウ等を除覆し、持ち上がった覆土はかん水等により落ち着かせる。その際、籾が露出した部分は、乾燥しないように覆土する。
- 晴天の日は、ハウス内が高温になるので、風の強い場合でも、育苗ハウスの風下側を開けてハウス内の温度を調節する。
- 低温や降霜が予想される場合には、ハウス育苗ではシルバーポリトウ等の被覆資材で苗を被覆するとともに暖房器具も併用して保温する。また、折衷苗代では被覆資材を二重被覆する。
- 育苗ハウスやトンネル内に温度計を設置し、生育時期に応じたきめ細かな温度管理を行う。
- 田植え5日前頃からは、日中は全面開放し、夜間も特別低温でない限り上部のみを覆い両裾を開けて外気にならし、丈夫な苗に仕上げる。

【生育時期別の温度管理（目安）】

生育時期	日　中	夜　間
育苗箱設置～出芽期	35℃以上にならないようにする	10℃以下にならないようにする
出芽期～1.5葉期	30℃前後	5℃以下にならないようにする
1.5葉期～3.0葉期	25℃前後	
3.0葉期～3.5葉期	20℃前後	

▼水管理

- 毎日かん水すると徒長軟弱な苗となるので、床土が乾いて苗の葉先が巻き始めたら、朝に育苗箱の底までしみ込むよう十分かん水する。
- 折衷苗代では、床土が乾燥した時は、箱の底面までかん水するが、箱内に吸水したら直ちに落水する。

▼追肥

- 追肥方式で育苗している場合は、1.5葉期頃と2.5～3.0葉期頃を目安に追肥する。
- 基肥方式の場合でも育苗後半に苗の葉色が淡く、肥料不足気味の場合には追肥をする。
- 追肥量は窒素成分で箱当たり1g程度（育苗箱100箱当たり水50リットルに硫安現物で500gを目安）とし、朝方の日差しの弱い時に行う。追肥後は、肥料ヤケを防ぐため、葉についた肥料が乾く前に水で洗い落とす。
- 新ロング入苗箱専用を使用している場合には、追肥は不要。

2. 本田作業

▼施肥等

堆肥等の有機物やケイカル、ようりん等の土づくり肥料は、低温や病害等に対する抵抗力を高めるので、積極的に施用する。

【基肥施肥の目安】

（10a当たり窒素成分：kg）

品種名	湿　田	半湿田	乾　田
まっしぐら	4～5	5～6	6～7
つがるロマン	3～4	4～5	5～6
青天の霹靂		6	

「青天の霹靂」育苗のポイント

- 徒長しやすいため、播種量、温度管理及び水管理を適正に行う。
- 健苗育成に努め、老化苗は使用しない。

「青天の霹靂」を作付けするほ場は必ず土壌診断を行い、診断結果に基づき土壌改良（ケイカル、ようりん等）を行う。

▼畦畔の補強
畦畔は、低温時の深水管理等ができるようかさ上げや補強を行う。

▼田植え
- できるだけ風のない温暖な日を選んで行う。
- 補植用苗は、ほ場に放置しておくといもち病の発生源となるので、補植が終わったら直ちに処分する。

▼水管理
- 田植えが終わり次第、直ちに2㎝程度の浅水にして活着を促進させる。温暖な日は2㎝程度の浅水にし、低温な日は苗が冠水しない程度の4～5㎝のやや深水にする。
- 冷水が入る水田では、ポリチューブ等を使用し水温を高める。
- かんがい方法は夜間かんがい（夕方又は早朝入水）の基本を守り、日中のかんがいや掛け流しは行わない。

▼除草剤
- 除草剤は使用上の注意をよく読んでから使用する。除草剤散布後3～4日間は水深を3～5㎝に保ち、散布後7日間は落水や掛け流しは行わない。
- ジャンボ剤は散布時の水深を5～6㎝のやや深水とする。また、藻類や表層剥離（ヂブタ）が多発している場合、拡散が不十分となり効果が劣る場合があるので使用しない。

りんご

発芽が早まるため春作業を急ぎましょう！
生育ステージに合わせて適期防除を！
「凍霜害に注意しましょう！」

野ネズミの被害が見られるので早めの処置を行いましょう。

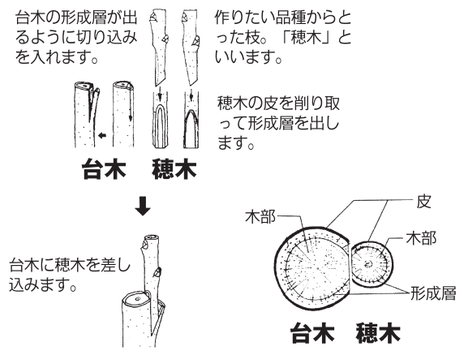
(1) 剪定が遅れると春作業に支障をきたすので早めに終了する。
(2) 剪定した切口は腐らん病や銀葉病の侵入を防ぐため、早めにバッチレートを塗る。
(3) 野ネズミの被害樹は、食害の程度に応じてバッチレートを塗布するか、保湿のためテープを巻く。

1. 施肥
施肥はできるだけ早いほど良く、遅くても4月20日頃までに行うようにする。ただし、樹勢が強い樹は、状況に応じて肥料を減ずる。

2. 石灰と有機物施用
石灰肥料を春に施用するときは、施肥を先に行い、降雨があったら2～3日後に石灰を施用してもよいが、降雨がない場合は2週間後位に施用する。石灰の施用後は、軽く耕うんするとなお良い。

3. 苗木の定植と欠木の補植
植穴は大きめに堀り、堆きゅう肥や苦土石灰、ようりんを施用する。
苗木の植付けに当たっては必ず苗木根部をトップジンM水和剤500倍、又はベンレート水和剤1,000倍液のいずれかに10分間浸漬、あるいは、フロンサイドSC500倍液に20分間浸漬する。浸漬後は根が乾燥しないようにしてできるだけ早く植え付ける。

4. 接ぎ木
●高接ぎのやり方
更新樹の収量を落とさず、早期結実を図るためには、高接ぎ更新が有利です。
①高接ぎ実施上の留意点
ア. 高接ぎ病の防止対策を徹底する。
無毒の樹から穂木を採る。
入手困難なときはマルバに高接ぎされて4～5年以上健全に生育している樹から穂木を採取する。
イ. 更新後、樹形が乱れないようにするため、樹の骨格を生かせるような接ぎ方をする。
②高接ぎのやり方
ア. 高接ぎには少し太めの穂木（直径6～10㎜）を使用する。一挙更新において接ぎ木本数が不足気味な場合は、樹勢維持のために接ぎ穂の生育に支障にならない中間台の枝をいくらか残すようにする。
イ. 枝の背面から出た新梢に接ぐと枝が直立して整枝上不便であり、また結実も遅れるので、側面から出た新梢に接ぐ。



5. マメコバチ
ふじの展葉1週間後頃の薬剤散布をした2～3日後に放飼する。
①マメコバチの巣箱は1群当たり2～6箱で、60～80m間隔に設置する。
②鳥の食害を防ぐために防鳥網を張る。
③防鳥網の内側に土取場として穴を掘り、土が乾いたら夜または早朝に水を入れて湿らせておく。
④カヤは3～5年に一度は交換する。

6. 人工授粉
良品多収のため積極的に実施する。また、開花から4～5日以内に行うようにする。

お役に立ちます

◎人工授粉のワンポイント
①ぼんてんによる人工授粉
花の採取量は1手かごで約20～30a分（王林乾燥葯48cc）
②ラブタッチによる作業能率
- 仕事量
10a当たり2時間位（ぼんてんの7～10倍の能率）
- 花粉使用量
10a当たり花粉20cc＋石松子80g

採取する花は、風船状のものが望ましい。

薬落とし機は、中央りんごセンターと本店グリーンセンターに準備しております。ご自由に利用下さい。

7. 摘花剤の使用
摘花剤は、開花量が多く開花中が好天で、結実が十分と見込まれるときに使用する。
散布時期は頂芽花の7～8割開花した満花日とし、10a当たり350リットル以上の石灰硫黄合剤100～120倍液又はエコルーキー100～150倍液を単用で、めしべに十分かかるように散布する。

8. 霜害防止対策
霜害が予想される場合には、気象台から霜注意報が発令され、ラジオ・テレビ等を通じて放送されるので、これらの情報に注意する。一般に降霜は晴天無風で、前日午後7時の気温が6℃以下の時に危険性が高い。
◇防風ネットは開けておく。

◇燃焼資材

資材名	使い方	10a当設置量
霜カット	おが屑：灯油＝2：1（1個2kg）	50個
防霜ロック	石綿＋灯油	20個

◇散布剤

資材名	倍数	使用時期
霜ガード	83～100倍	発芽直前～落花直後 効果5～7日
アイスバリア	300～500倍	
グリーンステム	500～800倍	

◇生態別危険温度

生育時期	発芽期頃	展葉期頃	開花期頃
危険温度	－5℃	－2℃前後	－1～－2℃

9. 摘果剤（ミクロデナポン）の使用
薬液は果実に十分かかるように散布する。本剤散布による落果はおよそ散布10日後頃から始まり、以後10～14日間継続する。ただし、年によって効果の発現が遅れたり、不十分な場合もあるので、仕上げ摘果は遅れないようにする。
つがる、ジョナゴールド、世界一など年によりジューンドロップの多い品種やもりのかがやき、ぐんま名月に本剤がかかると落ちすぎることがあるので、かからないように注意する。また、恋空及びシナノゴールドは本剤による摘果効果が低い。
※下部「摘果剤（ミクロデナポン水和剤85）の使い方」参照

10. 薬剤散布
●1回目
ふじの展葉1週間後
1. マシン油乳剤　200倍
2. ダーズバンDF　3,000倍
3. ベフラン液剤　1,000倍
※ダーズバンはマメコバチに対して悪影響を及ぼすので、散布時は園地内に巣箱を置かない。また、薬剤散布が終わった日の2～3日後に冷蔵庫から出し、園地に設置する。

●2回目　ふじの開花直前
1. 展着剤
2. カナメフロアブル　4,000倍
3. アタブロンSC　4,000倍
又はロムダンフロアブル　3,000倍

●3回目　ふじの落花直後
1. 展着剤
2. ミギワ20フロアブル　4,000倍
3. ジマンダイセン水和剤　600倍
4. アタブロンSC　4,000倍
又はロムダンフロアブル　3,000倍

※散布月日の目安は、テレグラム果樹チャンネルなどでお知らせします。

薬剤を散布した後は、必ずりんご栽培日誌（農薬散布履歴）に記入すること。

摘果剤（ミクロデナポン水和剤85）の使い方（りんご「9.摘果剤（ミクロデナポン）の使用」より）

品種名	使用目的	使用時期	本剤の使用回数	希釈倍数	10a当たり散布量	備考
ふじ、陸奥、王林、北斗、さんさ、トキ、早生ふじ、春明21、シナノスイート	摘果	満開後2週間頃（ふじでは横径10㎜位の時に散布）	2回以内	1,200倍	350ℓ以上	展着剤加用　有効成分NAC85%
紅玉、星の金貨		満開後3週間頃（紅玉では横径16㎜位の時に散布）				

※ミクロデナポン水和剤は、殺虫剤としての使用ができなくなりました。（摘果剤としてのみ使用する）